

シリーズ

「私の森林語り」

森林・林業との関わりの中で、様々な課題に挑戦されている方の取組を紹介します。



「森林が変われば社会が変わる」



信州大学人文学部
文化情報論・社会学 准教授
茅野 恒秀

■自己紹介

東京生まれの埼玉育ち。いわゆる「埼玉都民」でしたが、夏休みは父の故郷・霧ヶ峰の麓へ帰省する少年時代を過ごしました。国連の地球サミットは中学時代、大学に入学したのは地球温暖化防止京都会議が開かれた年です。環境問題と社会との関わりに自然と目が向き、環境社会学や環境政策の研究を志しました。

■活動内容

私の研究と実践の原点は、群馬県みなかみ町の国有林で二〇〇三



霧ヶ峰にて共有林の境界確認に同行しての調査

年から行われている「赤谷プロジェクト」。大学院に通いながら勤務していた日本自然保護協会の職員として、一万畝の森林を舞台に生物多様性の復元と持続的な地域づくりを進める枠組み構築に挑戦しました。

プロジェクトは今年で二十二年目、森林施業によるイヌワシの生息環境改善など成果を積み重ねています。特筆すべきは、今では町がユネスコエコパークやSDGs未来都市に選ばれ、森林資源を活用した地域づくりに多くの若者が結集していること。森林が生長するように、地域社会も育っていたのです。このような協働の場や、課題解決の社会的な仕組み

づくりが私の研究の柱です。例えば、長野県安曇野市の「里山再生計画」と連携した調査では、研究室の学生と一緒に市内をくまなく歩き、薪ストーブのあるお宅（約千六百軒）を全て把握、アンケートで薪の利用実態と課題を明らかにしました。



調査のついでに薪割りのお手伝いをするこも

長野県伊那市では、地場産の木のおもちゃが東京都新宿区の新生児に届けられる仕組みがあります。これが木工職人の経営を支え、地域に新たな協業を生み出していることの効果なども研究しています。



木工職人へのインタビュー調査。精巧な漆塗り技術の解説を受けている様子

■メッセージ

森林と社会は表裏一体の関係です。木材利用から気候変動対策まで、森林の多様な働きや機能をうまく活かすには、社会からの持続的な働きかけが欠かせません。森林や山村での暮らしに魅力を感じる学生は、今、確実に増えています。彼らと共に確かな未来をつくっていききたいと思います。

○連絡先

信州大学人文学部
〒390-0186
長野県松本市旭三二一
<https://www.shinshu-u.ac.jp/>

